

「ケセン語訳《聖書》を語る」

山 浦 ^{はる} 玄 ^{つぐ} 嗣

三つ子の魂

^{けせん} 気仙の山浦でございます。気仙といっても、皆さんには、どこにあるんだかなかなかわからないのではないかなと思いますので、簡単に御紹介しましょう。気仙は岩手県の沿岸の一番南の端にあります。気仙沼とよく間違えるわけですが、あれは宮城県でありまして、気仙と気仙沼とは違います。気仙沼の北の方にある岩手県気仙地方、それが気仙でございます。その気仙の山浦です。

私は昭和15年生まれです。今は、昭和で数えれば80年ですから、65歳になりました。私が生まれたのはたまたま東京なんですが、それはまったくたまたまで、すぐ岩手県の方に来て、ずっと^{おっきらい}越喜来村で育ちました。なにしろ辺鄙なところでした。ヤソ（キリスト教徒）は村には私共1軒しかなかった。それで、ヤソ、ヤソと白い目で見られました。何せ、江戸時代からヤソはキリシタン邪宗門と呼ばれて差別されてきましたし、大日本帝国時代には現人神である天皇陛下を、あれは人間だといって扱まなかったものですから、ヤソは国賊でありました。気仙の人たちはとても気の良いのが多いんですけども、でも、そういうわけでヤソには冷たかったですね。道を歩けば「ヤソ！」と罵られてですね、よく馬糞が飛んできます。それからベゴ（牛）の糞も飛んでくるんですね。ベゴの糞というのはライスカレーみたいで、ゴダゴダってね、なかなかつかめないんですが、あれをしばらく天日に乾かしておきますと、外が乾

註：ケセン語の文字表現では「ガ行の濁音」を「ガギグゲゴ」で、鼻濁音を「がぎぐげご」で表記しています。

いて、最中みたいになります。それをスッと持ち上げてヒュッと投げると、円盤投げのように飛んできて、さあ、これが当たると大変です。グシャッとつぶれて、全身、頭から足まで糞だらけになる。ヤソであるおかげでいつも糞だらけの青春を過ごしたのであります。そうは言っても、私も負けてなどいなかったもので、大いに反撃して、少年十字軍よろしく異教徒どもをやっつけて暴れていたんですけど、そんな少年時代を暮らしました。あまり自慢にはなりません。

中学校の頃になって隣の町に引っ越ししましたら、そこは日教組が天下を取ってしまって、共産党かぶれの先生が、社会科の授業の時に、ソビエト連邦は我々労働者の祖国である、スターリンは労働者の神様であると言うんですね。それで、「とんでもねえ。そんなことがあるものか。スターリンは神様でアねア」って、言って歩いたら、先生がカンカンに怒りましたね。「そもそも宗教は阿片である。世の中で宗教ほど悪いものはない。その中でも一番極悪非道なのはキリスト教である。このクラスにそのヤソがいるが、まことにもって人類の敵である」と言われました。それで今まで国賊だったのが人類の敵に昇格して、大したいじめられた経験があります。

そういう少年時代を送ってつくづくと思ったのは、「世間はヤソ、ヤソって、みんなしてヤソを嫌うが、イエス様、つまりヤソというのはそんな悪い人でアねアぜア。あれは大した良い男だぜア。だから何とかして友達に、みんながヤソ、ヤソと言って嫌っているヤソ様をきちんと紹介したいもんだ」ということです。そう思って一生懸命いろいろ説明するんですけども、誰も何だかわかんないんですね。俺の言い方が悪いからではないかなと思って、聖書を引っ張り出して、友達を呼んで来て、それを読んで聴かせたんです。ところが何が書いてあるのか、全然わかんない。昔の聖書ですから、文語体です。千年も前の言葉を真似して書いたような文章ですから、さっぱりわけがわからない。これではだめだと思って『公教要理図解』という挿し絵入りの本を引っ張り出してきて、それを見せたのですが、やっぱりわけがわからない。とにかく難しい言葉ばかり書いてある。「七つの枢要徳について」などと書いてあって、何のことかわかんない。それに東京弁だ。ますますわけがわからない。そして挿絵を見れば、裸にされた死人が木に吊るされている絵でしょう。

こんなの見たら、もう気仙の仲間は青くなって、「わあ、やんた、やんた。オソ気味が悪い。こんなものを拜んでるのか。まったくヤソづうものは何たらやんたもんだべ」って言って、みんな逃げてしまう。

それで、つくづくと私は思ったですね。イエス様の言葉をおら方の友達にちゃんとわかってもらうには、やっぱり東京弁で書いた聖書などではだめなんだと、おら方の、気仙の言葉で書かねアばだめなんだと、そう思ったんです。それが三つ子の魂で、百歳まではまだかなり間があるんですけども、65歳になった今でもその気持ちはこの胸の中に燃えているわけでございます。

ケセン語開眼

小学校3年生のときに、国語の先生がこう言いました。

「いいか、お前たち、綴り方っていうものはな、何も東京辺りの立派な言葉で書かなければならないという、そんなものではねアんだ。お前たちの毎日の暮らしのありのままの姿を、お前たちが語ってるその言葉で、そのとおりに書けば、それで立派な作文づうもんだ。そうやどして書いてみる。」

当時、生活綴り方運動っていうのが流行ってしまっていて、そういう指導を受けたわけです。それで私は喜んでですね、「あっ、ほんだら簡単ださ」と思って、「書くベア」と思ったんですが、1行も書けなかったですね。

「おらいのばっばア おれアどゴォ たゑアなしだって かだった」、つまり「うちのおばあちゃんは、ぼくを他愛のない(幼稚な)者だと言った」という意味です。いつもそう言われていたんで、そう書こうとしたんですが、「おらいのばっば」までは何とか書けたんですけど、「れア」っていう字はないんですね。「たゑアなし」の「ゑア」という字もないんですね。それから、「し」でも「す」でもないその中間の音を表わす文字もねアんですがすよ。それで、私は困ってしまって、先生のところへ行って、「先生、たゑアなしの《ゑア》っていうの、なぞに書いたらいいもんでごアせ？」って聞いたんですね。先生だって答えられるわけがありません。私はしつこい性格だったんで、おおいにしつこく聞きました。それで、先生はすっかり辟易して、最後にこう言ったのです。

「字にも書かれねえような言葉ア、語んな！」

私はそのとき初めてわかったんです。

「ああ、おら方の言葉には字がなかったんだ。学校で習っている字は、あれは東京辺りの人のための字で、気仙の人のための字ではねえんだ。何と悔しいことだべえ！」

私は悔しくて、「ようし、見ている。俺が大きくなったらば、必ずおら方の言葉に立派な字ば作ってみせるぞ。そしてその字でイエス様の言葉を書くんだ！」と思ったんですね。

時移り、星めぐって、私は医者になって、仙台の東北大学にずっとおりました。もう故郷を離れて随分経ってますね。そして、何て言いますか、あの当時の大学病院の風習で、名詞や動詞はドイツ語で、テニヲハだけが日本語であるという奇妙な混合言語を操って暮らしておりました。ある時に越喜来村の富七おじさんが久しぶりに仙台の私の家にやって来ました。私は父がなくて育ったものですから、このおじさんが私にとっては父親のような存在だったんですね。何十年ぶりかで会ったので、もう嬉しくて嬉しくて、一晚酒を飲んでしゃべったんですけど、その時に私はひどいショックを受けたのです。おじさんの話す言葉は全部わかるんです。当たり前ですね、気仙の言葉ですから。ところがそれに受け答える私の舌が回らなくなっていたんですね。すっかり標準語訛りに訛ってしまって、あの「し」と「す」の中間音がきれいに出てこないんです。私は愕然としました。

「何だ、俺は。東京だ、仙台だと旅をしながら、それなりにいろんな苦勞をして、やっとうこうやって医者になった。あの貧乏暮らしの苦勞の時に俺を支えたのは何だったか。俺は気仙衆だ、そういう誇りがあったから俺は今まで辛抱してきたんじゃないか。でも、気仙衆っていうのは何だ？ そうだ、気仙衆というのは気仙の言葉を語るから気仙衆なんだ。東京弁など語る奴はもう気仙衆とは言えないんだと、ずっとそう思ってきた。その俺の舌がいつの間にか曲ってしまった。気仙の言葉が旨く話せない。何という悔しいことだ。俺はいったいどこの馬の骨になってしまったんだ？」

そう思って本当に悲しかったですね。35歳の時でありました。

それから私は自分の中でおかしくなってしまったケセン語をもう一回

頭の中に復活させるということを試みることにしたのであります。

今までは気仙方言といわれていた。東北地方の方言はズーズー弁と言われて、人前でしゃべるとみんなに笑われたものです。本当にひどい差別を受けて悔しくてしょうがなかった。その気仙の言葉を何とかして自分の中にもう一回甦らせるんだと、そう思って、そして始まったのがケセン語の研究なんです。名前も「ケセン語」にしたんです。気仙方言なんてみみっちい名前はまっぴらだと思いました。「おら方の言葉は、英語ともドイツ語ともフランス語とも日本語とも対等なケセン語なんだ」と思ったのです。何となれば、「これは神様が作った言葉なんだ。俺たちは神様から作られたんだ。一人一人みんな神様から作ってもらったんだ。だからこの言葉も神様が作ってくださった言葉なんだ。だから神聖なケセン語なんだ」とそう思って、気仙方言などというけちくさい名前は、この誇りを汚すものであるから、やめてですね、ケセン語という名前をつけて、そして一生懸命になって勉強したんです。

元々私は医者で、言語学者ではありませんので、大した苦勞をしましたが、10年かかって『ケセン語入門』という本を作りました。文部省はそれまで方言撲滅というのを日本の教育の基本方針にしておりました。その撲滅の対象とされていた方言の教科書を作った。これは私が日本で初めてなんですね。それで、これが日本中に大変な反響を呼んで、NHKがこれですっかり改心しました。「今まで方言を撲滅する側になっていたのに、これは申し訳ないことをした。これからは方言を復権させなければならぬ」と言うんですね。それで私のケセン語についての特別番組を作りました。1時間番組を何回も作って、それを全国に放送しました。それで、全国に「方言復権、地方文化の復権」という意識が燎原の火の如くに広がったんです。これは『ケセン語入門』の功績だったですね。

私は故郷くにに帰って、それで、今度は『ケセン語大辞典』というのを、やっぱり15年もかかって作りました。その本は重くてここに持って来られなかったんですけど、上下2巻に分かれています。B5判、全部でざっと2800ページ、3万4000の見出し語に詳細な説明と、すべての語彙に用例がついています。ケセン語といいましても、人口僅か7万5千人のちっぽけな方言ですね。微小言語というべきものですが、それにこんな大きな字引を作った馬鹿な人は私しかいないですね。

聖書翻訳，最初のつまずき

それで、やっと、文法の研究が終わり、語彙の収集が終わり、その用例を詳しく調べることができて、25年かかって、私は自分の言葉で聖書を書くペンを手に入れました。気がついたら60歳になっていました。頭もこの通りすっかり白い爺になってしまった。これでやっとペンができた。さあ、これで念願の聖書の翻訳ができて、そしておら方のヤソ様のすばらしさをみんなに伝えるにいいぞ、そう思って、心も躍るような気持ちで聖書の翻訳に取りかかったんです。ケセン語とは言っても日本語の方言の一つですから、何も大して変わったものではない。「牛」って書いてあったら「ペーゴ」と直せばいいだけの話だと、初めは簡単に考えてたんですね。

今、我々は、カトリックもプロテスタントも力を合わせて、20年の歳月をかけて、日本中の優秀な聖書学者が集まって、2億円ものお金を投じて、そして作り上げた『新共同訳聖書』というものを持っています。カトリック教会もそれを公の典礼に使っているわけです。そういう立派な先生がたが作ったものですから、「こいつをそのままケセン語に直せばそれでいいんだべなあ」と、そう思っていたんです。それで始まったんです。そしたらば、1行も訳せなかった。

聖書というのは旧約から新約まであって、全部やってたら何百年生きても間に合わないのではないかと思いましたが、大好きなイエス様のことを書いた四つの福音書を訳そうと、まずそう思いました。最初の福音書は『マタイによる福音書』ですから、その一番最初を開いたのです。そうしたら何と書いてありましたか。「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」ですよ。私は生まれながらのカトリック。今まで何とも思わないでこの文を読んでいた。そして、これをケセンの言葉にそのまま直そうとした途端に、「えっ、おかしいぞ!」と思ったんです。

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」っていうと、「あれっ、イエス様に父さんが二人いるのかい?」ということになるではありませんか。それで、「ラゲ訳」っていうのを引っ張り出してみたら、これには「アブラハムの子なるダビデの子」って書いてあるんで、ああそ

うか、アブラハムの子のダビデのそのまた子のイエスと、こういう意味かと思いました。んだどもおかしいんでねアガ？ そのあとにずっと系図が書いてあって、イエスまで42代もあるんですよ。42代もあるのに何で子というんだ？ ケセンではそういうのは子といわない。子というのは第1代目の第1親等の直系卑属のことをいうのであって、その次は孫というし、その次は曾孫ひこまごというし、その次は玄孫やしごというし、あとはめんどくさいからゾンゾロゴという。そしたらイエスはダビデのゾンゾロゴなんです。「おかしいんでねアガ？ 何でダビデの子なんだ？」

それで他のところを見ていると、確かに「ダビデの子よ、私を憐れんでください」とみんなが言うんですね。「ダビデの子ア アブサロムとかソロモンであって、イエスでアなガンベど。おかしいべど！」と思ったんです。

そしているうちに、困ったことが次々と起こってきました。まず次に困ったのは「つまづく」という言葉です。ケセン語に「つまづく」という言葉はないんです。我々は何て言うかということ「けつまづく」って言うんです。「そこで人々はイエスにけつまずいた」と言いますと、イエス様がそこで昼寝をしていて、通る人がその長いすねに引っかかって、ステンと転んだことになるわけです。しかも人々ですから、随分たくさん来て、次々にステンステンと転んだ、こういうことにしかならないんじゃないか。それで国語辞典を調べたんです。辞書によりますと「つまづく」には二つの意味があります。一つは足が障害物に当たってよろけること、もう一つは事業が何かの障害でうまくいかなくなることです。そして最初の場合には「〇〇につまづく」と言う、後の場合は「〇〇でつまづく」と言うを書いてある。ある時『週刊新潮』を読んでいたならばね、「鈴木宗男はムルワカでつまずいた」と書いてありました。これが日本語ですね。ここを「ムルワカにつまずいた」って言ったら、ムルワカさんの長いすねに宗男さんの短いすねが当たって、ステンと転んだことになるわけであって、ムルワカでつまずいたということにはならないわけです。そうすると、この日本語はおかしくないかと思ったんです。あのときのショックはかなり手ひどいものでしたね。

私は子供の頃、童貞様に言われたんですよ。この「童貞様」っていう言葉は、今はもう何か古典的な言葉になって、知らない人も多いようです。

修道女のことですよ。この前、若い童貞様に「童貞様、童貞様」って言ったら、言われた方がキョトンとしてました。まさか自分のこととは思われなかったみたいです。で、昔、ある童貞様がおっしゃったんですね。

「山浦さん、聖書というものは信仰で読むものでございます。聖書を読むことは、即ち祈りでございます。」

それで私は、「あれは違う、違うぞ」と思ったんですね。

「聖書というものは、信仰で読むとだめだ。わけがわからなくなる。常識で読むほうがいい。」

そう思うようになったんです。

ギリシャ語を読め

「それにしても困ったもんだ、わけがわからない」と思って頭を抱えていましてね。ある時、学会に行った時、親友の崎谷満先生にお会いしたんです。この方は今北海道に住んでいらっしゃいますが、長崎の隠れキリシタンの子孫で、それこそ先祖代々筋金入りのカトリック。医者であって、聖書学者であって、しかも言語学者だといつてもない秀才、博学の先生です。この人に私の悩みを打ち明けたら、彼はカラカラと笑って言うんですね。

「山浦先生、日本語の聖書など読むからだめなんだ。新約聖書は何語で書かれたのか御存知ですね？」

「ギリシャ語で書かれたと聞いてます。」

「そうです。ギリシャ語からお訳しなさい。」

えっ、俺はもう60歳だ。そろそろ脳の動脈硬化も進んできている。今さら α 、 β 、 γ と何だかミミズののたくったような字を勉強しなければならないのかと、本当にがっかりしました。

「どんな翻訳にも翻訳にはみなある種のねじれがある。だから、翻訳の翻訳をしたらば、ますますわけがわからなくなる。特に日本語の聖書っていうのは出来が悪いから、あんなのを翻訳したらだめです。原本から訳しなさい。」

そう言われて、がっかりして帰ってきました。

「困ったな、どうしよう。」

そう思っていたら、いきなり宅急便が来たんです、ドサッと。「何だべ」
と思ったら、差出人は「崎谷満」って書いてある。それで開けてみたら、
ギリシャ語の聖書が入っている。ありやりやりやりやと思っていたら、次
の日も宅急便が来たんです。今度は、ギリシャ語の辞書が来たんです。
それからその次の日は、ギリシャ語の文法書が来たんですね。ドサッ、
ドサッと来るんですよ。さあ、ここまで追いつめられたら、皆さん、ケ
セン男児たるもの、後さ引くわけにはいかねアんでガすよ。

「くっそーっ！」と思ったですね。

「ようし、そんならば、俺も男だ。死にくたばれ、やってやる！」

そう思ったですね。それから私は本当に死にものぐるいになって、ギ
リシャ語に取り組んだんです。そしたらですね、案外大したことないん
ですよ。何とかわかるんだっけ。いろいろと参考書もあるし、虎の巻
も揃っているんですからね。別にギリシャ語の動詞のあの複雑な活用な
どいちいち暗記しなくたっていいんです。ギリシャ語で手紙を書くわけ
ではなし、聖書に書いてあることがとにかくわかればそれでいいもんで
すから。そうして、せっせとやっているうちにだんだんだんだんわかっ
てきましてね。やっているとなかなか面白いんですよ。今までわからな
かったことがわかってきたんです。

例えばさっきの話で、「ダビデの子」って何だという話がありましたで
しょう？ 子と訳されているのは「ヒュイオス」というギリシャ話なん
です。字引きを調べたら、確かに「子」って書いてあるんです。「息子」っ
ても書いてある。でもその後に、「子孫」っていう意味も書いてあるん
です。そんならこれは「子孫」って訳せばいいんでねアの、ねえ！ こうい
うのをね、ケセン語で「カバネヤミ」っていうんです。怠け者っていう意
味です。聖書学者はね、「カバネヤミ」なんです。一番最初の訳だけ取っ
てですね。「ヒュイオス」は「子」だから、「ダビデの子」と訳したんで
す。

これはおかしいんでねアか。我々は教会に行つて、御無理御尤もで教
えられているから、何となくそれでいいもんだと思ってたけど、これを
「世間様に通じるようにすっぺア」と思ったら、「子」ではだめなんです
よ。「子孫」としなくちゃいけない。そんならば「ダビデの御子孫様」、
これならわかるわけです。ダビデの子孫からメシアが生まれる……、そ

ういう伝説があったんです。ですから、「この方こそがそのダビデの御子孫に違いない、ああ、ダビデの御子孫様、私に目をかけてください」と、そう言ってるわけです。「ダビデの子」なんて訳すのは誤解のもとです。

それから「つまずく」。あれは「スカンダリゾー」という動詞の訳だとわかりました。「スカンダリゾー」ってどういう意味かといったら、これも辞書にちゃんと書いてある。「腹を立てる」です。……「怒った」ということなんです。つまり、イエスのですね、あまりにも非常識な言動に人々はむかつ腹を立てたと、こういう意味なんです。そんならそう書けばいいではないですか。何で「イエスにつまずいた」って書くんだ？

本当にそのとき、私は不信の塊になったんですね。「聖書なんか信じるもんでねア」と本当に思ったんです。それで、そういう意味でですね、徹底的に、日本語の聖書はもうやめたと決めた。それで全部、ギリシャ語から直接おら方の言葉でちゃんとわかるようなものにしていかなければだめなんだ、と決めたんです。そうして一生懸命になってやったわけです。やってるうちにいろんなことがわかってきた。そして、「聖書の日本語訳というが、何なんだ、これは？」と本当に疑問に思うようになったんです。

福音は誰のため？

皆さん、《こんえん》っていう言葉がありますね。皆さんは熱心な信者ですからね、私の話を聞きに来るくらいですからね、《こんえん》っていう言葉はよく知っていらっしゃると思うんですけどもですね、私、ためしに「《こんえん》っていう言葉を知ってるか？」ってみんなに聞いてみたんです、世間の人に。

「《こんえん》ってわかりますか？」

「何でガせ、それア？」

誰も知らないんです。70人ぐらい聞いたんですよ。そういうところはしつこいんです、私。山浦医院に患者さんが来ますからね、片っ端から患者さんに聞くんです。

「先生、腹が痛いんだ。」

「まあ、それはおいて、ちょっと《こんえん》って何だかわかりやすか？」

「わかんねアもの。早く腹ア治してけらっせん！」

そうやって聞いたんですけども、誰もわかんないんです。そのうち大船渡プラザホテルの番頭が来たんですね。結婚披露宴係の人なんですけど、その番頭にですね、

「番頭、番頭。」

「今日は風邪ひいてきゃしたが。」

「それはいいから、あんだア《こんえん》ってわかるか？」

「何す、それア？」

「そなたの商売だべア。」

「わかんねアね、聞いたこともねアね。」

全然わからない。誰も知らないんです、《こんえん》っていう言葉。それでね、おかしいと思ったんです、私。いつも愛用している『新明解国語辞典』っていう辞典を調べたんです。6万2千語入っている良い字引きですね。ところが《こんえん》って言葉は載ってないんです。それでね、『言泉』っていう、真っ黒い表紙でこんな大きな、15万語も入ってる字引きがあるんですけど、それを買って調べたんです。ないんです。それから『日本語大辞典』っていう、17万語ぐらいだったべか、そのぐらい入っている、重い字引もあるんです。それを調べたら、それにもないんです。それでますます困ってですね、20万円余りもかけて世界最大の国語辞典を買ったんです。全13巻、小学館『日本国語大辞典』っていう奴ですね。もうだいぶ貧乏になりましたよ、私は。これ以上大きな国語辞典はない。50万語も書いてあるんです。それで調べた。そしたら、やっとあったんです。

「婚宴：結婚披露宴。出典は聖書」って書いてある。

私はね、あれ見たときにはね、本当に憤怒^{ごせ}っ腹^{ぼら}ア焼けて、憤怒^{ごせ}っ腹^{ぼら}ア焼けて、髪の毛が逆立つような気分になった。何なんだ、これは！ 漢字で見れば確かに結婚の「婚」と披露宴の「宴」だから、目で見れば、それは結婚披露宴のことかなとわかる。わかるが、耳で聞いたんでは全く何のことだかわからない。ホテルの番頭も知らない。字引きにも載ってない。やっと載っていたと思えば二十何万円もする字引きの中に、出典は聖書って書いてある。こういう言葉をなして使わねアばなんねア？ 福音は一体誰のためにあるんだ？ 本当に私は腹が立ったんです、あれ

には。しかもそれがですよ、日本語にね、「婚宴」にあたる言葉がないならしょうがないかもしれない。例えば「預言者」とかね、「律法学者」なんてのはないからね、日本語には。だから漢字を組み合わせてああいう難しい言葉を作るんですけど、それはまあある程度やむを得まい。しかし、結婚披露宴とか婚礼とかっていう、世間様でごく一般に使う言葉があるのに、何でわざわざ「婚宴」という言葉を使わなくちゃいけないのか。これは大きな問題ではないかと私は思う。

皆さん、日本にはですね、プロテスタントとカトリックと合わせてもですね、人口の0.8%しかキリスト信者がいないんです。カトリックは0.35%ぐらいしかいない。0.35%っていうのは、人口1万人当たりたった35人しかいないということですよ。もう吹けば飛ぶようなもんで、いないと同じですね。仙台教区なんかは、人口1万人当たり15人しかいない。まるっきりいないと同じです。要するに、よほど変わった人しかヤソにはならないということなんです。当り前の日本人はヤソにはならないのです。だからここにいる皆さんはかなり変わった人なんです。そりゃ当り前だと思った。こんなわけのわからない言葉で書いた聖書を見て、これを信仰で読む人なんて、本当に変わった人だ。当り前の日本人が、「ああ、そうですか、いかにもごもつとも」と思うか？ 思わない。思う人はよほど変わってる。だから、当り前の人でもわかるような言葉にしなければおかしいのではないか。キリスト教がこの日本で、明治以来一生懸命頑張ったのに一向増えませんよね。増えないどころか、この頃はますます高齢化が進んでしょぼしょぼになってますね。かなり危ういですね。こういう状態に陥っているのは、まさに福音が世間に通じていないからではないのかな、これが一番の原因でないかな、と私は思うようになったんです。

敵を愛せるか

キリスト教は愛の宗教だと、こう言われますよね。けども「愛する」、……こんな変な日本語、ふつう使わないですよ。大抵それは男女の恋愛について言うのであって、それでも気仙の男は、「愛する？ ふっ！ おらア嬢^{ガガ}にだってそんなな事^{ゴト}ォ語ったゴトアねア」と言うので

あります。まともな気仙男はね、そんな変な言葉は使わないんですよ。何と言うかという、顔をポッと赤くして、「惚れた！」と言うのでありますよ。これがケセン語なのですよ。「愛する」なんて、そんな胸くその悪いことなんか言わないんだ。

それで、この「愛する」も、私、調べたんです、どういう意味かと。例の50万語の辞書で調べた。そしたら、「愛する」というのは「自己本位的感情だ」と書いてある。びっくりした。これは好き嫌いの問題です。好きであるというのは、極めて自己本位的な感情です。つまり、自分が気に入った相手は愛するけども、気に入らない相手は愛さないんです。太めの女性が好きな男は、太めの女性が来ると愛するわけですな。ガラボシ（＝瘦せっぽち）のような人が来ると愛さない。あくまでも自己本位なんです。ですからこれは上から下への感情なんです。「主君が家臣を愛する」と言いますね。けども「家臣が主君を愛する」という言い方は日本語にはないんです。冗談ではない。それはものすごく失礼なんだ。じゃあ目上の人に向かっては何て言うか。「お慕いする」と言うんです。これが日本語なんです。これを逆転させちゃダメなんです。だから、夫は妻を愛するのです。でも、妻は夫をお慕いするのです。これが日本語なんです。最近では夫も愛していただいていますから、幸せなんですけど、まあ、これが日本語というものなんです。ところが明治の中頃にキリスト教が解禁されて聖書の翻訳が始まった。そしたら、当時の人が何を思ったか、「アガパオー」というギリシア語を「愛する」と訳した。これはとんでもない誤訳だったと私は思います。神様を愛する？ ペットじゃあるまいし！ とんでもない話です。

この「愛する」と「慕う」の関係を逆転した例が日本の古典文学の中で、たった一つだけあります。教えましょう。『壺坂靈驗記』です。御存知ですか。「へ妻は夫をいたはりつ、夫は妻に慕いつつ、頃は六月中の頃……」って言うのでしょうか？ これは逆転した言い方なんです。夫が妻を慕うというのは、驚くべき表現なんです。だからこそ座頭沢市の哀れな身の上がよくわかるのです。目の見えない座頭の沢市が女房お里に手を引かれて、壺坂寺の観音様に「どうぞこの目を治してください」とお祈りに行くその哀れな姿を言ってるわけですから、これを聞く人は、「愛する」と「慕う」の逆転したこの表現から夫婦の置かれている状況がわかると

いう仕組みです。これが日本語なんです。だから、神様はお慕いすべき方であって、決して愛してはならないのです。ペットじゃないんです。これがどういうわけか、こういう変な訳を使ってしまったので、わけがわからなくなってしまった。

その極めつけが、「汝の敵を愛せよ」ですね。冗談ではないですよ。私、国語辞典が大好きなんです。何があっても国語辞典、すぐ調べるんですね。『新明解国語辞典』によれば「敵」というのは「できればその存在をなくしてしまいたい相手」って書いてある。上品に言ったからそう言うので、「できるならばぶっ殺してやりてア」と思っている奴のことを言うわけです。そういう相手を自己本位的感情で好むということなどは到底不可能なことであります。聖書を読む日本人って結構多いんですけども、大抵の人はここでがっかりきて、「冗談でねア、こんな事オできるわけアねア」と思うんです。そして、もうばかばかしくなって、聖書などぶん投げてしまうんですね。この障害を乗り越えた人が0.8%の希少価値を持っているわけです。これ、大変な関門なんですね。

この「愛する」を、昔のキリシタンは何と訳したか、調べました。彼らは「愛する」というのは妄執の言葉だと言って嫌っているんです。それはそうです、自己本位な感情なんですから。『ドチリイナ・キリシタン』という本では「愛する」という訳は使ってないんです。「大切にする」と書いてある。これはね、すごい訳だと思うんです。ケセン語では「大切に^{デアレ}する」って言うのと、何だか標準語くせア。それでおら方では「大事にする」って言うんですね。だから、あそこは「敵^{かたギ}だっても大事にしろ」と、こう言ってるわけです。そうすれば、「ああそうか、上杉謙信か！」と、聞く人は思うんです。憎い敵の武田信玄、血で血を洗って一生戦い続けた憎い憎い敵ですよ、その信玄が塩がなくて困っていると聞いて、「相手も人間だ」と言って、越後の国から塩を送り届けた。この素晴らしい精神を我々日本人は民族の誇りとして持ってるわけです。日本人って結構ヤソなんです。敵だっても大事にしろ」って言われれば、「おお、いかにも！」と納得できるんです。ところがこれを「敵を愛せ」と言われたらがっかりくる。「冗談でねア、そんなことなど御免蒙る！」こう思うのも当たり前でねアか。……そうなんです。

21 世紀のグーテンベルク登場

こうやって私は、一生懸命になって、世間様の言葉に通じるような福音を作りたいと思って、本当に汗水垂して頑張ったんです。そしてやっと、この本ができたんですね。この本ができるのにも実に涙の物語があるんです。だって、人口7万5千人しかいない気仙ですよ。カトリック信者は100人しかいないんですよ。真面目に教会に来るのは30人かそのぐらいなんですよ。気仙衆はみんなヤソなど全然関係ないんですよ。そういうところで聖書をケセン語に訳したからといって、いったい誰が買うのでしょうかね。

会場入り口のホールで本を売っていた人がいたでしょう？ 熊谷雅也君という、何となくイエス様みたいな顔をした人がいたでしょう？ あれはね、印刷屋なんですよ。ある時、飲み会の時に彼が私に言ったんですね。

「俺は人の名刺だのチラシだのばかり刷って一生を終わりたいかねア。鷹は大地に爪痕を残して発つというけれども、俺も何かそういう仕事をしてア。それで、来年から21世紀になるので考えた。俺は21世紀のグーテンベルクになる！ グーテンベルクは印刷屋の祖先だ。そういう仕事をしたい！」

……とそう言うんですね。名刺に「21世紀のグーテンベルク」とわざわざ刷って、それを私にくれたんですよ。

私はしめしめと思って、こう聞いたんです。

「グーテンベルクが何をしたか知ってるか？」

「はい、彼は世界で初めて聖書を出版しました。」

「そうだ。21世紀のグーテンベルクもやっぱりそうしなければいけない。俺はケセン語の聖書を今書いてるんだが、お前、この出版を、やるか？」

何しろ熊谷君は出版なんて全然したことがないので、その恐ろしさを何も知らない。この無知な哀れな友人は、酒の勢いで「もちろんやります！」と奮い立ったんですね。これが気仙男児の良いところですね。やがて私が原稿をドサッと送ったら、しばらくして青い顔して来たんです。

「先生、グーテンベルクの伝記をもう一回読み直してみました。……彼

は最後に破産しました。」

気の毒だとは思ったけれども、しかし、気仙男児の一言は金鉄の如し！

「神様がいいようにするさ」と言って作ったのが、この『マタイによる福音書』なんです。『マッテアが便り』。

この本は、御覧のように、こういうふうになっていて、見開きの左側がケセン式ローマ字で書いてあるんです。これは、ケセン語を書き表わすのには一番優れたやり方で、文法構造から意味から発音からアクセントまで最も正確に表わせる。しかし、一般大衆にはなかなか難しい。それで右側のページに同じ内容を漢字仮名交じり文で書いてある。それでもそのまま書いたんではわからないから、意味を漢字で書いて、そしてルビで発音を表わす。例えば「ホォデアナシ」という言葉がありますな。気仙の人ならわかりますけど、札幌の人はわからないかも知れない。それで、漢字で「理解力欠如者」と書いて、上に「ホォデアナシ」とルビをふれば、イエス様がペトロを「このホォデアナシ！」と、怒鳴りつけたのがよくわかるという格好になっております。それから、本の後ろの方にはがっちりと解説を付けてあります。今までの伝統的翻訳とはガラリと変わった訳を私はいっぱいしましたので、なぜそういう訳をしたのかということを一説明してあります。

……と、こういう本を作りました。しかし考えてみると、気仙の人でもケセン語の文字で書かれた文章を読んだことのある人は一人もいないのです。だから気仙の人にこれを読ませても読めないんです。妙なもので、我々の知っている文字というものは元来標準語のためにあるものなんです。その字を使ってケセンの言葉を書いてやっても、それが読者の頭の中でパッとケセンの言葉にはならないんです。そういう訓練ができてないんです。だめなんです。それで、「だめだ、これア。これア全部、俺ア読むベア」と思いました。耳で聞けばわかる。それで私はこれを全部朗読して、CDに焼き付けたんです。CD、1枚80分。80分で3枚ですから4時間ですよ。たっぷり楽しめる。これを全部合わせて一つにして、こういう本を作ったんです。

ケセン語ミサを作る

そしたら仙台の溝部司教様がものすごく喜んでくださって、「これはキリスト教の日本土着の最も優れた業績である。よって司教ミサを挙げてお祝いをしよう。ついでにはミサをケセン語でやるから、ミサの典礼文をケセン語に直しなさい」と、こういう御命令が下って、さアさア、大変なことになった。それから、「聖歌もみんなケセン語にしなさい」って言うんですね。

ところが、これね、簡単にいかないんですよ。なにしろ教会でお祈りしているお祈りは、この聖書ばかりでなくお祈りそのものが、とにかくわけのわからない言葉に溢れていまして、そういう言葉で我々は神様を拝んできたんですね。

例えば「神よ、あなたの名によって私を救い、あなたの力で守ってください」というお祈りがあります。でも、「名前によって救う」ってどういう意味ですか？ わけがわからねア。

「信仰の神秘、主の死を思い、復活を讃えよう、主が来られるまで」っていうのもありますね。これも何のことだかわからないですよ。みんな首をひねって相談しました。

「これ、普通の言葉で言うにはどうしたらいいんだ？ おい、信仰の神秘って何だよ？ 神秘ってなんだよ？」

「わけのわかんないことを神秘って言うんでねアのか？」

「んだら、信仰の神秘って何だ？」

「わけのわかんねアことを信じてるってことでアねアか？」

「あっ、そう言えばそうだよな。んだってな、死んだ人ア生き返ったんだからな。わけがわかんねアよな。」

……というわけで、ここは「ほんに不思議なゴッだども、旦那様ア死んでまだ生ギだ」と、こう訳したんですね。こういう御ミサを作って、にぎにぎしくケセン語ミサをやったんです。その時にケセン語で聖歌も作ったんです。

ところが、ケセン語で聖歌の歌詞までは作ってみたけれど、メロディーがないんです。「誰か、作曲する奴アいねアか？」と言ったんですけれども、そんな気の利いた人はおら方にはいないわけですね。「しょうがな

い。俺が作る」と言いましたよ。

私は音楽会に一度も行ったことのない野蛮な人間ですから、本屋に行って作曲の本っていうのを買ってきて、「えーっと、四分音符ってどれだっけ」とかいう具合に、たいしたウザネェ吐いて、つまりさんざん苦勞して、いいんだか悪いんだかわからないけれども、とにかく聖歌なるものを作ったんです。そして、おら方の信者の人に「これ、歌え」って言ったら、誰も歌えない。それで「困ったなァ」と思っていたら、ちょうど山浦医院の患者さんにお寺の坊さんがいたんです。その坊さんが、「さんご合唱団」という合唱団を持っているんですよ。気仙では一番立派な合唱団なんですね。それで、その坊さんに頼んだんです。

「何とかケセン語の聖歌を和尚様の合唱団で歌われねァもんだべか？」

主治医の言うことですからね、なんぼ坊さんでも「嫌だ」とは言えないわけで、「おお、ようがすよ」。それで話を聞いているうちに、坊様はだんだんだんだん乗ってきて、「いやあ、それは面白い話だ。おらは仏様、そなた様はヤソ。んだどもこの際、ヤソも仏もどうでもいい。ケセンの言葉に、こういう崇高な精神文化を乗せるということはたいしたことだ。一肌脱ぎァすべァ！」と言って、引き受けてくださったんです。それからその合唱団は一生懸命稽古して、たいした立派な歌になったんですね。そしてそれを最後にCDにしたんです。その録音の、いよいよ本番という時に、この坊様は倒れて死んでしまったんです。本当に残念だったですね。バチカンに連れて行きたいと思ってたんですけど、まさか仏罰があたったわけではあるまい、きっと今頃は天国で神様の懐に安らかに憩うていらっしゃるのではないかと思います。本当に良い和尚さんでした。

そこで皆さんに、「谷川の水を求めて、喘ぎさまよう鹿のように」というあの詩篇をもじって、神様の心を気仙の人たちに伝えたいという思いを歌にしたその歌を、ちょっとお聞きいただきたいと思います。1番目の歌っこをお願いします。

(聖歌 鑑賞)

たにがわ みず た た
 谷川の水ば探ね探ね
 たにがわ みず た た
 谷川の水ば探ね探ね、
 あえ まよ しか
 喘ぎさ迷う鹿っこのように、
 かみさま めアさま して も
 神様、お前様アどゴオ慕ア申す。

おら こごろ めアさま ぼ
 俺等ア心アお前様アどゴオ追っかゲ、
 めアさま なづ
 お前様アふとゴろオ懐ガしむ。
 めアさま ひざ と
 お前様アお膝に取りすがって、
 がお なが いづ ゴッ
 お顔オ眺めんのア何時の事たベエ？
 ひる よる かみさま こ
 昼も夜も神様に焦がれで、
 なみだ の もの
 涙のほかにア飲み物もねア。

おも お ち
 思い起ゴせばこのケセンの地で、
 めアさま こどば き も
 お前様ア言葉ア聞ギ申した。
 むね たがな こごろ よろゴ
 あの胸の高鳴り、心の喜び。

おれ こごろ なして しず
 俺ア心ア何故ガ沈む、
 おも みだ よふといおどろ
 思い乱れで夜一夜目覚グ。
 おら とも なぞ
 俺等ア友さ如何にして、
 かみさま こごろ つた
 神様の心オ伝えベエ？
 かみさま かみさま おら もつ
 神様、神様、俺等ア許つア、
 なぞ ちから け
 如何にガ力ア与でけらっせん！

ケセン語の世界に少し浸っていただきたいと思います。

かまけア 寵返し息子の話

話を少し変えて、それではケセン語訳聖書というのはどのようなものなのかというのをちょっと私の朗読で聞いていただきたいと思います。

私、聖書はどこも良いなと思っていますけれども、特に好きなのは「放蕩息子のたとえ話」ですね。ケセン語で言えば、あれは「かまけアし」

と言うんですね。「かまけアし」、あるいは「かまどけアし」と言います。「かまど」というのは家の経済の象徴でありまして、それをひっくり返す者という意味です。道楽に身を持ち崩して、破産して、さっぱりだめになってしまえばか者のことですね。これを「かまけアし」と言うんです。「放蕩息子」というのは、まさにこれ「かまけアし息子」ということでもあります。

なお、皆さんがわからないといけないので、二、三の言葉の説明をしますが、長男のことを我々は「親方」と言います。弟のことは「舎弟」と言います。それから、遺産のことを「跡式」と言います。これは古語ですね。そういうことをちょっと念頭において、あるいはわかりにくいところもあるかもしれませんが、聞いてみてください。

かまけア むすこ たど 寵返し息子の喩え [ルカ 9 : 11~31]

また、ヤソアこうも語りやった。

「ある人に息子ア二人あつたつた。舎弟ア父親さこう語つた。『お父様ア、遺産の俺ア取り分俺ア許つア与でけらっせん。』そんで父親ア息子等さ持つた物オ分ゲでけた。それなら間もなグ舎弟アその買つた物オ全部銭に替アで、遠グの国さ旅に発つた。そうして、其処で、放蕩の限りイ尽グして遊び暮らし、大量蕩尽ど湯水のように銭イ使つた。

こうして、一文無しなつた時、その国ア何処も彼処も酷い不作で、飢饉んなつてしまつた。息子ア食う物にも事オ欠グ有り様んなつた。そんで、その国に住むある旦那所さ身イ寄せだ。その人アこの息子アどゴオ畑さ遣つて、豚ア養わせだ。息子ア、せめで豚の食う豆でも食つて、腹ア満腹グしてアもんだど思つたつたども、それでさゲア与る人ア居ながつた。

息子ア、自分に返つて、こう語つた。

『お父様ん所で働ぐあの大勢の働ぎつ人等にア、有り余るくれア食い物アある。んだども、俺ア此処で飢饉のために腹ア減つて死ぬどゴだ。腰イ上げで、お父様アどゴさ行グベア。そうして、こう語んベア。《お父様ア、俺ア神様さも、お前様さも、悪い事オシアした。今でア如我者ア、お前様ア息子だなんとど語らィる値もねア者

になり下がりアした。俺アどゴォお前様の働ぎっ人下男の一人にし
てくはなりゃんせ。』

こうして、息子ア腰ィ上げで、父親ん所さ戻り帰った。
未だ遙ガ遠グ離れでだったのに、父親ア、息子ォ見付けで、その
衰れな有り様に胸も張り裂ゲるような思いで、走ねで、走ねで、倅ア
首さ緋り付ギ、頬擦りィした。

息子ア語った。『お父様ア、俺ア神様さも、お前様さも、悪い事オ
シアした。今でア如我者ア、お前様ア息子だなんとど語らィる値も
ねア者になり下がりアした。』

んだども父親ア下男等ア許つア語った。『急いで行って、最上の
衣装オ持って来て、この童衆さ着せでけろ。腰にア絹の帯ィ締めで、
足にア履物オ履ガせでけろ。其方等ア行って、子っこ牛の肥えだのオ
引いで来て、屠せ。さあ、宴会アして、喜ぶベア。この童衆ア死ん
でだったのに生ギ返り、居なグなってだったのに見付かったんだ。』

こうして、その家の人達ア喜びの宴会さ着手った。
長兄ア畑さ居だった。家の近グさ来たれば、歌ったり踊ったりす
んのア聞えで来た。そんで、下男等の一人ば呼び付ゲで、聞いた。

『この騒ぎア何だれ？』
下男ア語った。『お前様ア舎弟殿ア帰って来てやんのす。達者で
戻ったア何よりだって、大旦那様ア子っこ牛の肥えだのオ屠しや
りアした。』

長兄ア憤怒エ焼アで、如何にしても家さ入んべどしなガった。そ
んで、父親ア出はって来て、『中さ入れ！』って語ったども、長兄ア
父親ア許つア返答オ返して、こう語った。

『見らっせんや。俺アなんぼ長年お前様ア許つア仕ア申して来た
ガ。お前様ア言い付ゲに背いだ事も一回もなガったゴアすとオ。ん
だども、お前様ア、俺ア友どして楽しむのに、山羊っこの一匹も与
だ事アなアゴアすとオ！ とゴろア、遊女等どしてお前様ア遺産ィ
食い潰したこの竈返シア戻り帰って来たれば、お前様アこの者アた
めに、子っこ牛の肥えだのオ屠しやったんだ。』

父親アそゴで倅ア許つア語った。『倅エ、其方ア常時俺どして居
る。そうして、俺ア物ア全部其方ア物だ。其方ア舎弟ア、死んでだっ

たのに^い生き返^{ゲア}り，居^いな^グな^ッて^だった^のに^め見^つか^った^んだ。宴^{おふるめ}会^ア
して喜^{よろこ}ぶ^のア^あ当^めだ^り前^めだ^どォ！』

おらほのヤソ様は，もし気仙さ生まれでならば，こんなふうに語った
んでねアかと，私は思うのであります。

ふるさとのイエス

子供の頃，友達もあんまりいなくて，父親にも死に別れて，一人寂しく越喜来村の砂浜の防潮林の松林の中で沖を眺めていた時に，馬に乗った村の男が民謡を歌いながらやってきました。そして，私の前の細い道を通り過ぎていく時に，真っ黒けの無精ひげの生えたひげづらの中から白い歯をニヤツと見せて，私の方を見て，笑いかけて，そして去って行きました。その時に私は，心臓が喉まで飛び上がるような気分になりました。私がイエス様に出会ったのは，その時が初めてだったのです。

私は，ときどきイエス様に会いました。ある時は浜で地引き網を引いていました。エーッショ，エッショ，エッショ，気仙の浜で地引き網をみんなして引いてたときに，私の前にいた肩幅の広い漁師が，エーッショ，エッショって一緒に網を引きながら，フイツと振り向いた時，それがイエス様でした。

釘打ち遊びをするための古い五寸釘を探しに普請場へ行きました。気仙は気仙大工といって大工の多い所です。気仙大工の若い者が一人そこで鉋をかけていました。私が古い材木の中で五寸釘を探してたら，「それ！」って大きな手に五寸釘を1本乗せて，私の目の前にニュツと突き出しました。それが私のイエス様でした。

夢のような話です。でも，子供の頃，私は本当にそう思っていたのであります。イエス様は，……誰も知らないけどイエス様は，この越喜来の村に住んでいるんだ。この大工殿がそうなんだ。そして，一緒に網を引いたり，カッコ（小舟）に乗って船を出して，魚を釣っているあの漁師たち。浜^{はま}人^どたち。あの人たちは，あれがペトロなんだ。あれがアンデレなんだ。そしてあの大工の嬢様はマリア様なんだと私は思っていました。ずっとそう思っていました。私のイエス様は気仙大工の一人でした。

ですから、気仙大工のイエス様が東京弁を話すはずがないのであります。イエス様が我々のところに来たら、やっぱりイエス様はおら方の言葉でこんなふうに語るのではないかなと私は思っていました。

それから大学に行ったり、都会に住んだりして、しばらく私はイエス様を見ることがなくなりました。子供の夢は遠く過ぎ去りました。でも、越喜来の浜辺に立って、私はケセン語訳聖書をときどき自分で読みます。すると、何だか私の脇に子供の頃に出会ったあの幻のイエス様がにこにこ笑いながら座っているような、そんな気がするのです。

私は難しいこともわからないし、お祈りするのあんまり好きでない。飽きてしまうんですね。「めでたし（天使祝詞）」10遍唱えるともうたくさんだ。もう飽きてしまって。そんな私でも砂浜でイエス様と並んで腰をおろしている、そういう瞬間を持てるということは、「いいなあ！」と自分で思う時があります。

セケン語

東京大学に呼ばれて講演したことがあります。そこで、ケセン語について話をしました。たくさんの先生たちが来て、その前でしゃべったんです。そしたら、私を紹介してくれたその教授が、「これは岩手県の山浦先生ですが」と言って私を紹介した時に、ケセン語というのを間違って、「セケン語の研究をしています」と言ったんです。もちろん看板には「ケセン語」って書いてるわけですから、みんな大笑いしました。でも、私はこの間違いをものすごく有難い間違いだと思っております。そうなんです。ケセン語はセケン語なのであります。そして、世間様に通ずる言葉、それがセケン語なのであります。岩手県気仙郡ではそれがたまたまケセン語なのであります。世間の人々が耳で聞いただけで、「ああ、いかにもそうだな」と腑に落ちて感動できる、そういう言葉にイエス様の言葉を訳していかないと、載せていかないと、イエス様の心は我々の友達の胸には届いていかない。

幸いにしてここにいる我々は、本当にめずらしい体質を持っているんです。日本人としては非常に変わった人たちなんですけども、とにかく福音には命があると、人を生かす力があると、こう信じている仲間たち

なんですね。せっかくそういうお恵みを神様からいただいているのですから、これを自分たちの仲間に、一人でも多く伝えるようにするのが我々の一番大きな務めではないのかなと思います。

心の貧しい人

「山上の垂訓」というのがありますね。「八つの幸せ」っていうイエス様の話があります。あれも非常に有名な言葉で、日本中でも世界中でも本当によく知られている言葉ですけれども、あれぐらいわけのわからない言葉もない。「心の貧しい人は幸いである」なんて言いますがけれどもね、気仙の人に「心の貧しい人」って言ったら、ケセン語では、趣味低劣で、がりがり亡者で、成金趣味で、人の痛いのも痒いのも一向に理解力欠如ほオでアなくて、他人に対する同情心も全くない、そういうさもない奴のこのことなのです。

「あいつア成金で、いかにも懐に銭っこア喰ってつかも知らねアけんとも、実に心の貧しい奴だ」って言うんです。

反対は心の豊かな人です。「あの人ア貧乏してつともな、本当に心の豊かな人だぜア。ボロは着てても心の錦」と言うんです。これが日本語なんです。

気仙だって札幌だって、そうでないでしょうか。「心の貧しい人は幸せである」と言って、世間の人「ああ、そうですか」と思いますか？ 我々だって思ってないですよ。だからしょっちゅう神父様に聞くわけです。そうすると神父様は、何だかしどろもどろと変な説明をするんだけど、一回も腑に落ちたためしがない。わけがわからないんです。ただ、神父様の言うことだし、それ以上聞くのも不調法だし、なんだか罰が当たりそううまくないから、わからないのは自分の信仰が足りないからだと思って、一生懸命「めでたし」100遍ぐらい唱えればわかる日も来るだろうと、そう思って我慢してるだけの話で、本当は全然わからない。なんぼ待ってもわからないですね。

あれも訳し方が悪いんです。「ホイ・ブーホイ・トイ・ブネウマティ」というのが原語なんですね。「ブネウマにおいてブーホイである者」です。ブーホイというのは、「縮こまる」という意味なんです。縮こまっ

ている人、弱々しい人、そういうことを言うんです。だから乞食のことなんです。貧乏人で、乞食でっていう、そういうのがプトーホイです。とにかくフニャフニャ弱々しい奴のことだ。どこが弱いかというと、プネウマがフニャフニャだという。プネウマって何かというと心という意味もちろんあるんです。だから「心の貧しい人」というのは理屈から言えば誤訳じゃないんです。ないんですけれども、そう訳すと、日本語の「心が貧しい」という表現には慣用句として全然別の意味があるから、それと抵触してわけがわからなくなるんです。

プネウマっていうのはもともと風です。風は息であり、息は命であり、命は心であり、魂です。ギリシャ語においては、全部これが一つ、プネウマなんです。区別してないんです。でも日本語はギリシャ語よりももっと発達した言葉ですからね。だから、ちゃんと区別していろいろ言うんです。彼等は古代の人です。古代の人たちは、風も息も命も心も魂も全部プネウマ、同じだと思っていたんです。ですから、これはもっと具体的に考えればいい。プネウマがフニャフニャしてるってことは、要するに、鼻息の弱い人という意味です。フーッ！これがプネウマですから、フニャフニャフニャ……と鼻息の弱い奴という意味です。これってどういう奴かということ、銭っこもない、望みもない、希望もない、体力もない、何もない、頼るのは神様だけ、そういう惨めな人のことを言ってるわけです。私みたいなのは鼻息の荒い人、これは天国にはなかなか入れない。

そういう意味だっというのがわかったので、私はここを、ああいうふうには訳さないことにしました。「頼りなく、望みなく、心細い人ア幸せだ。」こうすればはっきりわかるんでねアの！なぜ幸せなのか。「天の国はこの人たちのものであるからだ」と言う。そう言ったって、天の国って何のことだか、これもよくわからない。「頼りなく、望みなく、心細い人は幸せだ。神様の懐に抱かざるのァこの人達だ」と言ったんです、イエスは。

柔和な人

その次は「柔和な人は幸せだ」ですかね。柔和。私、ケセン語訳聖書

を作る時に、大方針を立てたんです。それは、「漢語を使わないこと」です。漢語というのはもともと中国語です。目で見なければわからない言葉、耳で聞いてもわからない言葉です。さっきの「婚宴」が一番いい例です。勿論、漢語を全部取り払えば日本語はもう成立しなくなる。これはしようがない。基本的な語彙にまで入ったものまで取り除く必要はないけれども、平仮名で言えるものはなるべく平仮名で言った方がいいに決まってるんです。だから漢語はなるべく使わない。柔和というのは漢語です。気仙人はそんな難しい言葉はふつう使いません。何て言うかという、「穏やかだ」と言う。「穏やかな人は幸せだ」、当たり前でしょう？ 幸せだから穏やかなんです。「何でわざわざこんなことを言うんだ？」と思います。そんなこと、イエス様に言われなくなつてよくわかってますよ。おかしいです。

穏やかな人と言われて、我々がどういう人を想像するかというと、お金持ちの大旦那様で、お腹も少し出てて、絹の座布団にゆったりと座っていて、お茶を飲んで、静かに微笑んでいる、そんな穏やかな旦那様ですね。金持ち喧嘩せずって奴ですよ。我々の文化では、貧乏人はいつも腹が減っているので気が立っていて、気が荒くてすぐ喧嘩することになっているんです。だから穏やかでないんです。ところが聖書というのは、正反対だ。穏やかな人っていうのは、我々の語感から言えば金持ちの人なんですけども、聖書のギリシャ語で「プラーユス」、ヘブライ語で「アナヴ」というのは貧乏人のことなんです。日本語の聖書では貧乏人のことを「穏やかな人」と訳しているんです。何で貧乏人が穏やかなのか。それは当時のガリラヤの様子を考えるとよくわかる。

ものすごくおっかない王様がいた。さらにその上にはもっとおっかないローマ皇帝がいた。そして人々を奴隷のように搾取して、ものすごい重税を課していた。稼いでも稼いでも税金に取られて、人々はどんどん没落して、自分の田畑を売り払い、そして奴隷的な小作人になる。それでもなおだめで、遂に身売をして奴隷になって落ちぶれていく。そういう人が満ち溢れていた。そういう状態に我慢ならない血の気の多いガリラヤ人は猛烈な反乱を起こす。この頃にガリラヤのユダという者が大反乱を起こしました。彼らはローマ軍によって鎮圧されて、何と2000本の十字架で処刑されたそうです。恐ろしいですね。数えてみると、イエス

が12歳の頃の話ですから、彼は確実にこれを見ていると思われます。そして生き残った奴はどんな奴か。要するに、反抗心も何もすっかりなくなってしまった、奴隷根性の染み込んだ意気地なし、そういう奴だけが生き残っている。意気地なしで甲斐性なしで、だからますます貧乏にもなるわけですがけれども、そういう人のことをヘブライ語で「アナヴ」、これを「柔和な人」と訳してるんです。右向け、はい。左向け、はい。卑屈に地に這いつくばって、まったく反抗しない。できない。これが「柔和な人」の正体です。「柔和な人」では、イエス様の言ってることが全然伝わってこないんです。だから私はここを「ずくなし」と訳した。「ずくなし」、意気地なしのことですね。

「ずくなしのけアしよなシア幸せだ。その人達ア神様の跡式イ受ける。」

ここは日本語の聖書では「地を継ぐであろう」となっている。「地を継ぐ」って、何のことかわからない。あれは土地を遺産相続するっていう意味だそうです。つまりそういう貧乏人は土地なんか持ってないわけですよ。「猫の額ぐらいだけでもいい、自分の畑を持ちたいな」と一生願いながらも持てないで、そして落ちぶれて死んでいく。そういう人たちが神様の跡式を受取るぞ、という。どういう跡式なのか、それは示されてないけれども、「ああ、救いが近いんだな!」、これを聞いた人たちはそう思ったんでないでしょうか。こういう話が満ち溢れているんです。

義？

「幸いなるかな、義に飢え渴く人、彼等は飽かされるであろう」ともあります。「義に飢え渴く」、何だかすごく立派ですよ。新選組かな、なんて思ったりしますよね。違うんですね。「義」というのは、ギリシャ語で「ディカイオスユネー」、ヘブライ語では「ツェダカー」。これは何のことか。神様のお心を行なうこと、これを「ディカイオスユネー」、あるいは「ツェダカー」と言う。それを日本語で「義」と訳しました。何のことだか一向わかりません。では神様は何をお望みかという、人と人とが等しくあることをお望みになるんだという。だから、「ツェダカー」を行なうということは、具体的には施しのことなんだそうです。そうすると、「幸いなるかな、義に飢え渴く人」というのは、実は、施しにあり

つきそこねて、腹が減って、喉が渴いている乞食のことなんです。イエスは「施しにあだづギそゴねで、腹ア減って喉ア渴いでる人は幸せだ、満腹グなるまで食わせられる」って言ったのです。

そして、その反対が「幸いなるかな、義のために迫害を忍ぶ者。天国は彼らのものなればなり」ですね。義のために迫害を忍ぶ、何か勇ましいですよ、白虎隊みたいですよ。でも、そうじゃないんです。これはつまり、こういうことです。

「旦那さん、施シイけでけらっせん。おらア腹ア減ってわがんねアんだ。食う手段アねアんだ。今朝からまんまア食ってねアんだ。家にア嬢もいる。餓鬼等もいる。みんな腹ア減って死んでしまう。旦那さん、頼むがら、千円でいいがら、500円でもいいがら……。」

こう言って、乞食が寄って来ます。

「ああ、そうか、そうか。しょうがねアな。んでア、ほれな、千円けっからな。」

そうすると、それ見た他の乞食がまた来るわけですね。

「ああ、旦那さん、俺アもつつアも。」

「ああ、そうか、そうか、ほれほれ。」

要するに、そんなふうだから、もちゃもちゃもちゃもちゃといっぱい来るわけですね。しまいには財布の中にお金がなくなってしまう。

「おあ、俺、銭っこアなくなったぜア。今日アこれで勘弁してけろ。」

「そんなことオ言わねアで、旦那さん、別のポケットにもまっと入ってんでアねアのすか？」

「いやあ、頼む、助けでけろ、助けでけろ。」

……そして逃げ回る。乞食はどこまでも追っかけていく。

「迫害」と訳されている「ディオコー」は「追いかけてまわす」という意味だったんです。つまり、これは、ツェダカーのために追いかけて回されている、施しをくれくれと言って、責められて、追いかけて回されている人のことなんです。気の良い旦那さんなんです。これが冷酷無情な旦那だったら、「やかましい、この腐れ乞食！」と言って、下駄でボカッと頭アくらつける。そういう人には誰も寄りつかないですね。だけどこの気の良い旦那さんには、乞食が慕い寄って来るわけです。そして、追っかけてまわすわけです。「そういう人は幸せなんだぞ。神様の懐にしっかり

抱かざるのはそういう人なんだぞ」とイエスは言ってるのです。

さすらいの乞食坊主

考えてみれば、イエス様という人は、もともと大工なんですよ。ちゃんと大工をやってれば、まともに飯が食えたんです。それなのに何を思ったか、家出してしまったんです。聖書には、イエスの兄弟というのが書いてありますね。イエスの弟が4人いるって名前も書いてあります。妹も2人以上いるんですね。「妹たち」と書いてある。一応、教会ではマリアの子はイエスたった一人で、この弟と書いているのは従弟のことだなどと言ってますけど、福音書を見るとどこにも従弟とは書いてない。ちゃんと兄弟と書いてあるから、そのとおりに見れば、この家には母さんのマリア様がいて、父さんは死んでしまってもういない。マリア様は後家ですね。それで長男のイエスが一生懸命家業に精出して、母さんと幼い弟たち、妹たちを養ってたわけですよ。それが何を思ったか、急に家出してしまったんです。そして旅の説教師になって、何かおまじないをして、めくらを治したり、痛いところを治したりとか、無免許医療みたいないろんな変なことをやって、そして人を集めて、神様のお取り仕切りはこうだ、ああだと言って、こう、言って歩く乞食坊主になってしまったんですね。

だから、イエス様の説教には、実に彼の生活感が溢れているんですね。施しにありつきそこねて、腹が減って、喉が渴いて、そしてその辺で石を枕に野宿している、そういう哀れなイエス様の姿がダブってくるではありませんか。誰かが「弟子にしてくれ」って言ったら、「狐には巢穴がある。鳥にもねぐらがある。俺には何もねア」って言った。「そんでもいいか？」って言った。そういうイエス様の境涯が実に身につまされるような「真福八端」なのであります。

こんな有り様にマリア様もさすがに頭にきて、ナザレ村の……ナザレ村は人口500人ぐらいしかいない小さな村だったそうですね。だからみんな親戚でつながっていたわけですよ……ナザレ村のおじさんたちに頼むわけです。そして、言うんです。

「どうも^{おらい}我家の息子は気が違ったと言われてる。頭がおかしくなったら

しい。」

ちゃんと聖書に書いてある。私が勝手に言ってるんじゃないですからね。

「お願いだから、捕まえてきてくれ、逮捕してくれ」と言うんです。

それで村人がイエスを逮捕しに来たんです、縄を持って。でもね、逮捕未遂に終わるんですね。それはそうですよ、イエスの周りにいたのはみんな荒くれ男ばかりですからね。あの過激派のシモンとか、雷の子と言われた荒くれ漁師とか、そんなのがごろごろいて、「何だ、おめえは？」とかって睨まれれば、ナザレ村の貧乏百姓なんかはたまげて腰抜かしてしまうわけです。それで逮捕、未遂。

それで遂にマリア様は本当に頭にきて、他の弟たちや妹たちを引き連れて、カファルナウムまで出掛けて行きますね。そしてイエスが説教している家の外までやって来て、「話があるから来い」と言うわけですね。そうするとイエス様が、まあ、本当に親不孝なことを言うんですけど、「俺の母親ってのは誰のことだ？」と言うわけですよ。目の前にいるのにですよ！「俺の言うこと聞くのが俺の母親だ」と言うわけですよ。あの親子関係は、あまりうまくいってなかった……。それで、結局これも逮捕未遂で、マリア様はすごすごとまた帰っていきます。可哀相ですよ。

たぶん財布を持っていたイスカリオテのユダなどが気を利かせて、後ろから走って行って、「いやあ、すみません、すみません。あのオ、いろいろと当座の御都合もあるでしょうから、これはお布施でもらったものの一部ですけど……」とか言って、少し渡したのじゃないかなと、何かそういうことまで考えてしまいたくなるような福音書の情景なのでありますね。

そういうそのイエス様、……我々には神様としてのイエス様はわかりません。なんぼ考えたってわかりません。けども、人間としてのイエス様はわかるはずだ。わからなければいけない。わかってあげなければ、あまりにも可哀相だ。何のために彼は十字架につけられて、あんな目に遭って死んだんだ。誰からも見捨てられて死んだ。そのイエス様の心を、人間として、……神様としてのことは、そりゃあ、わかれつつって無理だ。無理だけれども、せめて……人間としてあの男をわかってあげなけ

れば、あんまり可哀相じゃないかと私は思う。だから、イエス様をわかりたい。そして、そのわかったイエス様を私の友達に伝えたい。そう思います。

ローマは日本晴れ

私はケセン語訳聖書をこうやって作りました。4冊作りました。そしてこいつを持って、去年のゴールデン・ウィークにバチカンに行きました。教皇様に特別謁見を願い出ました。ついてはこっちにも都合があるんで、ゴールデン・ウィークにしてくれって、日取りまで指定して特別謁見を申請したんですね。こんな申し込みをした人は、バチカンの歴史上たぶん初めてだと言われました。ところが、待てど暮らせど全然返事が来ない。ほんでも行くことにして、「行けば何とかなるべ」ということにして、計画をした。教皇様がだめならば、教皇様の代理の、代理権を持っているカルディナーレ、枢機卿を教皇代理にお願いして、そして謁見をしていただくこと、そう思って、濱尾枢機卿がちょうど枢機卿になったばかりだから、濱尾様をお願いをして、枢機卿謁見の段取りをしました。「どうせ教皇様はだめだべ」と思って、それですっかり段取りをつけておりましたら、出発10日前になっていきなりバチカンから電報が入ってきて、「謁見を許す。バーチャマーノを許す」と来た。バーチャマーノというのは大変なんですよ。教皇様の前に進んでいって御手に接吻するんです。あれはそんじょそこらの人にはできないんだ。「こりゃあ、大変だ！」ということです。それで私は、一人で行くのも何ですから、辺り洛中の人みんなに「おい、行かねアか、行かねアか？」って声をかけました。街の人たちに片っ端から、

「行くか？」

「おらア、ヤソでもねアのにいいのすか？」

「いいさ。あべ、あべ！」

……って言って、ヤソでもないような人をいっぱい引き連れて、教会からも勿論何人か行きましたけど、そうでない人もいっぱいいて、30人ぐらいで「ケセン遣欧使節団」というのを作って、そしてバチカンに行ったんです。

「でも、どうやってこれ、持って行く？ ただ持って行って、ハイッて渡すのも格好悪いんでねアか？」

「んだな。東北地方だから、津軽塗りのお盆に入れて、水引を掛けて、持って行くか。」

……などと考えたんですけど、その話を聞いた岩手県の江刺市の人間国宝みたいな岩谷堂箆笥を作る職人がいるんですね、菊地さんという人がね、その人がこの話を聞いて、この人もヤソでないですよ、

「いやあ、そういう話ならばおら方の誉れだ。一肌脱ぎゃすべア！」

……って言って、立派な、こんな箱を作ったんです。ケセン語訳聖書を入れる岩谷堂箆笥ですよ。ちゃんと4つの本の厚さに合わせた仕切りも作って。だからこの箱はケセン語訳聖書の入れ物としての他には何の役にも立たない物なんですけど。それをケヤキで作って、漆を10回も塗って、観音開きの扉をつけたんですね。その扉に銅版で、それはそれは精巧な金具を付けて、ケセンのシンボルである椿をくわえた鳩が飛んでいるのを打ち付けて、作ってくれたんです。買えば50万円もする奴ですよ。それをただで作ってくれた。岩手県の人ってのは良いところありますよね。

そいつを持って、ローマに行ったんです。そして教皇様に差し上げて参りました。ローマで御ミサも捧げました。

主の祈り

ちょうど良い時間になりましたので、最後に、そのバチカンで捧げた時の歌をお聴かせしたいと思います。これは「天にまします (=主の祈り)」です。ええ、いい天気でしたよ、空が青くてね。ローマは日本晴れだった。ケセン語の「天にまします」が、そのバチカンの空高く鳴り響いたのでありました。

(聖歌 鑑賞)

マタイ 6 : 9 ~ 13

てん においでのお父様、
その名も高グ、あつ尊でア！

お取り仕切りの来るように。
 お膝元ひざもとでのそのように、
 神様かみさまア心こころアこの人ひとの世よに、
 上首尾いへあんべどそのままなるように。
 今日きょうの飯まんまも食くせでくなはりゃんせ。
 人ひとの科とんがも許ゆるすがら、
 俺等おらア科とんがも堪忍かんにんしてくなはりゃんせ。
 俺等おらア心こころア闇やみに迷まよわねアように、
 災難さいなん、難儀なんぎの起おギねアように。

ケセン語の「天にまします」でした。

現場感覚を生かそう

この本は気仙の人のために書いた本なのに、どういうわけか気仙で売れるよりも遥かに外で売れました。副作用の方が大きい薬のようです。全国の方々から、みんなに喜んでいただきました。この前は沖縄から講演を頼まれて、「えっ、何で沖縄でケセン語？」と思ったんですが、沖縄の人もものすごく喜んでくださいました。それで、東京の人からはこういう手紙をいただきました。

「私は東京生まれの東京育ちで、東北弁など聞いたこともないし、わかるはずもない。だけど、わかるはずの標準語の聖書よりも、わからないはずの東北弁の聖書の方がよほどよくわかるのはなぜでしょう。」

返事のしようがないんですね。でも、そういうお便りを、実はその方からばかりではありません、もう何十通といただきました。

これはなぜだかわかりませんが、やっぱり……この私は、俗世間に生きる者です。聖職者ではありません。ただのヒラです。舌先三寸で世の中を渡っている者です。そういう人間は世間に生きる言葉の現場感覚というものを持っているんです。医者ですから、この舌先三寸で人の命を操る商売をしているわけです。私の舌一つで人が死んだり生きたりするんです。

皆さんだって、やっぱり多かれ少なかれそうなんです。世の中で生き

ていくっていうことはそういうことです。言葉の現場感覚を持ってるわけです。

ところが聖書学者の先生方は、象牙の塔の中の尊い人々でありまして、これに「我々のような言葉の現場感覚を持て」と言っても無理なんですね。それは酷なことであります。ないものねだりをしてはいけません。ないものねだりをしないで、「自分でやりましょう」と私は思うんです。そして自分でやったら、……たぶん私の翻訳もあちこち変なところもあるでしょう。間違いもあるでしょう。当たり前なんです。私は聖書学を勉強したこともないし、ギリシャ語に特別堪能なわけでもありません。神学も知りません。何も知りません。知ってるのは公教要理ぐらいなものです。でも、それでも……一生懸命になってやったら、何だかわかるような聖書ができてきた。「これならば、俺、自分でも納得できるな」と思うようなことが随分多くなりました。

これはですね、我々がみんなでやるべきことだと思います。私は気仙の仲間のためにやりました。皆さんは、札幌の隣りのお友達のためにやってください。世間語訳福音書を作りましょう。

日本人って、結構、立派な国民なんです。上杉謙信を生んだ国民なんですからね、大したものなんです。キリスト教に向いているんです。けれども、今までの翻訳がどうも良くなかった。世間様での現場感覚のない言葉で書かれていた。それはそれで立派な作品かもしれない、学問的には。だけどそれが世間に通用しないんです。世間の人、「ああ、いがつたな！」と思えるような、そういう福音を作っていくのが、世間に生きる我々の仕事だと私は思います。

皆さん、一緒に手を携えてやっていこうではありませんか。

幸いなことにこの本は、ざっと1万冊近く売れました。驚くべきことです。カトリック信者40万。プロテスタントも40万。合わせて80万。真面目に教会に来てるのはその4分の1っていうと20万。20万人の中で1万冊売れたのだったらば、20人に1人が持ってるということです。これを買わないと、もう時代遅れですよ！ ぜひグーテンベルクが破産しないようにしてください。私は印税を一銭ももらってないですから、大威張りで言います。この本は確かにちょっと、そんなに安くはありませんけれども、しかしこれだけの豪華本で、CDまで付いている。CDだっ

てその辺で買ってごらん下さい。1枚2千円もするんですから。それで、彼がこの本をこの値段に抑えたということは、彼は本当に決死の覚悟でこれを作ったということです。その心意気をぜひ酌んでやってください。そして、もし私のこの作品をお聞きになって、私が朗読したあの「竈返し息子」を語ったおら方のヤソ様の言葉をお聞きになって、「ああ、いいな、こんなヤソ様もいいな」と思ったら、ぜひこの本をお求めいただきたいものだと、思っております。そしてこれを、いたらない例かも知れないけれど、こうやれば世間語訳聖書になるんだという、一つのサンプルにさせていただけたらと思います。

皆さん、教会は何だかこの頃、みんな年寄りばかり増えて、さっぱり若いのがいなくなって、神父様たちもすっかり何だか^{まがまが}虚弱腰曲となって、数も少なくなって、共同司牧だとか何とかって心細くなってですね、どうもうだつがあがらない。意気があがらない。こういう時代ですが、これをはねのけて、我々が本当に日本のキリスト教というものを作っていくのは、これからなんだと思います。

本日は大変ありがとうございました。

付記：本稿は2005年7月17日に行なわれた「藤女子大学キリスト教文化研究所主催 第7回公開講演会」の内容を文章化したものです。